

ました。』

『ア、夫りや豪い事ちや。コレ龜吉、貴様をば供に連れて行く筈ぢやが、躰からだが小さいので社衾じようげき挟み持て、ヒョッコラ〜隨いて來るのも、恰好が悪い、裏に定吉が若旦那の番してよるさかい、貴様定吉と番を代つて遣れ。』

『へー……定吉とん、定吉とん』

『オイ。何や龜吉とん』

『今番頭はんが、旦那はんの代理かわりで若狭屋はんの葬式送りやはるね。其お供が私たいでは躰が小さくて見つとむ無い、そんで此處の番を私が替つて、お前が番頭はんのお供をするのや』

『ア、夫ふすると若旦那の番はお前がするのやナ。よし〜。そんなら此割木渡しとくさかい、確かり番してや。今若旦那能ふ眠てはる依て夫處開けなや。お前居眠て若旦那逃がしたらあかんで。お前が粗相したら俺いも共に落度になる依つて可えか。確かり割木持て氣イ附けてえよ。……へ、スツクリ行きやがね。若しあとで彼處開けて若旦那居やはれへんのが解つたら、汝おのれが居眠りやがつて若旦那を逃がしたんぢや、確かりせえちうて、彼奴が頭を撲ぶかれよる、俺りや二十錢貰ふて高見の見物や、其内に彼奴が泣いて眠て仕舞ひよる。若旦那が歸つて來やはる。鮮は俺いが一人で喰ふ。ア、スツクリ〜』

『コレ〜定吉』

『へー。ア、チンチリガン。スツクリ〜。エーライヤツチャ……』

『彼んな事云ふて踊つて腐る。仕様の無い奴ちや。サア急くのやがナ、早ふ紋附の着物と着替えて來い……サア早ふしいや……オ、着替えて來たか』

『へエ、着替へて來ました』

『サツ。その社衾じようげき挟みを持つて俺しに隨いて來う……』

『へエ』

辻を曲りますと最う葬式はポツポツ繰り出して居ります。

『へエ誰方様も、エー此度は思ひも寄らぬ事で、まことに御愁傷

